

幸田延のウィーン留学

平高典子

要 約

幸田延(1870-1946)は音楽取調掛(のちの東京音楽学校)で学んだのち、第1回文部省音楽留学生として、1889-90年ボストンで、1891-1895年ウィーンで研鑽を積んだ。ウィーンでは、ウィーン音楽院に入学し、ヴァイオリンを主専攻に、和声学、作曲、ピアノなどを学んだ。途中休学もしたが、最終的にはすべての教科を「1(優)」で修了し、「Reife」を取得し卒業した。当時のウィーンは、世紀転換期を迎えて、文化的に非常に成熟した時期にあり、音楽的にも充実していた。延は音楽院の内外で研鑽を積み、また自らも積極的に現地の生活にとけこんで、当時の西欧の音楽をリアルタイムに吸収し、日本に持ち帰り、日本の音楽界に演奏家として、教育者として、多大な影響を与えた。また彼女がローベルト・フックスのもとで作曲したヴァイオリン・ソナタは、日本人による初のソナタ形式による器楽曲である。

キーワード：幸田延，ウィーン，洋楽受容

1 はじめに

幸田延は明治3年生まれ、幸田露伴の妹で、ヴァイオリニスト・音楽教育家の安藤幸の姉である。15年音楽取調掛に入学、18年音楽取調所を卒業し、第1回文部省派遣音楽留学生としてアメリカとオーストリアに留学した。帰国後東京音楽学校の教授となり、音楽教育家、演奏家として活躍したが、音楽学校やメディアから攻撃を受けるようになり、42年休職した。再度2年間ヨーロッパで音楽事情を視察し、帰国後退職、その後は、昭和21年に亡くなるまで民間にあってピアノを教えた。芸術院会員。作曲作品もいくつか残している。

本稿では、西洋音楽のパイオニアとも言われる幸田延の最初の留学のうち、ウィーン時代を取り上げ、その具体的な内容を明らかにする。

年号は、原則として渡欧中は西暦で、それ以外は元号で記した。

2 ポストンからウィーンへ

延は明治22(1889)年5月3日横浜港を出帆し、同月末からアメリカ・ポストンのニュー・イングランド音楽院で学んだ後ウィーンへ向かった。22年4月、文部省派遣留学生に公式に命じられた下命書には〈音楽修業として満三年米国及び独逸国留学を命ず 但バイオリン科を専修すへし又初一ヶ年は米国ポストン府ニューイングランド、コンセルバトリーに於て後二ヶ年は独逸国に於て修業すへし〉¹⁾とあり、初め1年をポストンのニュー・イングランド音楽院で、後の2年をドイツで学ぶことになっていたが、〈種種の事情の爲め〉²⁾オーストリアへ向かうことになる。具体的な理由は不明だが、当初ドイツに決められていたのが、22年頃には東京音楽学校の中心となっていたディットリヒ³⁾の提案で、彼の母校であるウィーン音楽院をめざすことになったと考える。

延の帰国後の談話「外行記要」によると、1890年7月ポストンを発ち、19日ニューヨークからドイツ汽船で単身出帆した。27日ブレーメン着、29日ブレーメン発ベルリン着、グノーの《ファウスト》を見、東京音楽学校の2年後輩で同僚でもある比留間賢八⁴⁾他の邦人に会っている。

8月ウィーンに到着、田中正平⁵⁾が駅まで迎えに来ていた。田中の発明になる純正調オルガンを見るついでに2、3日〈フヒツスラウ〉⁶⁾(ウィーン南のBad Vöslauか)にオーストリア全権公使の戸田氏⁷⁾を訪問した。14日帰京し、下宿を始めている。

当時の延のドイツ語がどの程度であったかははっきりしないが、同月15日公使館からの帰途、迷子になり言葉が通じないので公使館に戻って送ってもらったと記しているのが、当初言葉には苦労したようである⁸⁾。

以後1年間〈音楽院外にて修行せし〉⁹⁾、つまり、おそらくヴァイオリンやドイツ語を学んで入学試験に備えたのであろう。そののち、延は1891年9月5日ウィーン音楽院入学を許可される。当時音楽院は「楽友協会音楽院 Konservatorium der Gesellschaft der Musikfreunde」と称していたが、本稿では「ウィーン音楽院」で統一する。

ウィーン楽友協会所蔵の音楽院関係資料に延の資料がいくつか残っている。

まず「出願のための音楽歴申告書 (Musikalischer Studiengang des Unterzeichneten)」は自筆で、〈いつから音楽のレッスンを受けているか?〉という質問に対し、〈2年半ヴァイオリン〉と答えている。彼女はすでに日本でヴァイオリンを習得していたが、ここでは、ポストンでヴァイオリンを専攻し始めてからの年月を答えたと考えられる。また既習楽曲に、クロイツァー、ローデ、シュポーア、ヘルメスベルガーの音階練習曲、マイゼーダー等を挙げている。書き損じや、スペルや筆記体の書き方の間違いが多く、また〈ピアノ演奏ができるか?〉に対して〈はい〉と答えるべきところを〈Klavier (ピアノ)〉と答えるといった解答の仕方の間違いもあり、延のドイツ語がまだ問題が多かったことを窺わせる。この文書では日付は空欄になっている。

9月5日付入学願書(Aufnahmegesuch)は延の筆跡ではなく、音楽院側が作成した記録である。

そのためか生年月日が1872年3月（実際は1870年）となっている（学籍簿Matrikelでも1872年3月）。出身学校は、Bürgerschule（高等小学校）となっている。入学願書と学籍簿によれば、当時の住所は音楽院からほど近い6区（Mariahilf）のMagdalenenstraße 15であった。延はのちに〈住居は程近い所に家族的に寄宿させて頂きました〉¹⁰⁾と述べている。主専攻はヴァイオリン、指導教官は、ヨーゼフ・ヘルメスベルガーであった（息子。教師陣については後述する）。1892/93年度の音楽院規則（授業要項）には〈女性のヴァイオリン習得は特に才能の認められる場合にのみ許可される。オーケストラの授業は許可されない〉¹¹⁾とある。実際延は卒業時ヴァイオリン専攻の卒業生12名の中で唯一の女性であった。努力家の延のヴァイオリン技術がアメリカで飛躍的に向上し「特に才能の認められる」レベルに達していたか、ディットリヒから彼の恩師ヘルメスベルガーへ何らかの特別措置の依頼があったかのどちらかと思われる。もっとも1892/93年度規約にはドイツ語の十分な知識を入学条件にしており、延のドイツ語が決して十分であったとは思えないことから、これらの規定はある程度柔軟に適用されていたのかもしれない。

音楽院年報¹²⁾によると、音楽院には専門コース（Ausbildungsschule）と準備コース（Vorbereitungsschule）があり、延が受験して合格したのは前者であった。

規則によるとヴァイオリンの入学試験では、技術的な練習曲、12の練習曲から1曲、初見、自分で選んだ曲の演奏が課せられた。授業料は150シリング、授業料免除の特典もあったが、延は受けていない。

3 音楽院での4年間

学籍簿及び音楽院年報によって延の4年間を追ってみよう。

まず学籍簿に残る成績を挙げる。年報と相違している部分は、学籍簿を優先した。

1891/92年 第1年度	成績
主専攻 ヴァイオリン（ヘルメスベルガー） A（専門コース）	1（優）
副専攻 和声学（グレーデナー）	1
副専攻 ピアノ1（ジンガー）	1
歌唱練習 参加せず	
合唱練習 参加せず	

この年度の5月で本来の留学期間は終わるはずだったが、2年間の延長が許可された。

1892/93年 第2年度（年報には年度全体に〈12月まで、以後休学〉とある。以下同じ。）

主 ヴァイオリン（ヘルメスベルガー） A2（〈12月まで、以後休学〉）	1
副 ピアノ2（ジンガー）（〈12月まで、以後休学〉）	1

音楽史 空欄
 室内楽 空欄
 歌唱練習 参加せず
 合唱練習 参加せず

1893/94年 第2年度 (留年)

主 ヴァイオリン (ヘルメスベルガー) A2 (<自発的留年>)	1
副 音楽史	1
和声学 (主専攻のクラス) (ローベルト・フックス)	1
副 ピアノ2 (ジンガー) (<自発的な再履修>)	1
室内楽 空欄	
オーケストラ練習 空欄	
歌唱練習 参加せず	
合唱練習 参加せず	

1894/95年 第3年度

主 ヴァイオリン (J.ヘルメスベルガー) A3	1
副 ピアノ2 (年報に載っているが学籍簿にない)	1
副 対位法 (年報に載っているが学籍簿にない)	1
室内楽 参加 (おそらく聴講のみで成績はつかなかった)	
オーケストラ練習 参加	

<参加せず>とあるのは登録はしたが授業には参加しなかったという意味であろうか。

規約(授業要項)では、専門コースのヴァイオリンは週6時間で3年間学ぶことになっていたが、延は留年があって4年で修了した。91/92年度ヘルメスベルガーのA1(1年生)のクラスは年報では10名のうち9名が学年末試験に合格した。扱う曲は、例えば94/95年度の3年生では、パガニーニの練習曲、ベートーヴェン、ブラームス、ブルッフ、ヴェータン等主要な作曲家たちの協奏曲、タルティーニ等旧イタリア派の作曲家の曲、エルンスト、サラサーテ、ヴィエニャフスキーの現代曲、転調練習、等が挙げられている。卒業試験曲は、試験日14日前に決定された曲、自分で選んだ比較的大きい曲、20の練習曲から1曲、初見演奏、転調(女性にはない)、ヴィオラでの初見演奏、となっている。

副専攻のピアノも週5時間で3年で修了する(年報では、初年度から2年生のクラスに入っていたことになっている)。ジンガーのクラスは91/92年度19名のうち10名が合格している。内容は、例えば94/95年度は音階や和音の練習、簡単なカデンツァの作曲、ツェルニーやベルティーニの練習曲、クレメンティ、ツェルニー等の簡単なソナチネ、クレメンティ、モーツァルト、

ハイドンの簡単なソナタ、転調練習、等となっている。ヴァイオリンに比べるとかなり初歩的である。

和声学は週3時間、グレーデナーのクラスで、91/92年度登録は133人であった。

なお、在籍中学内演奏会に出場しておらず、卒業演奏会にも名前が見受けられない。

学籍簿と年報から、延は修了と同時に「Reife」（卒業資格）を取っていることがわかる。94/95年度年報によると、この資格を取得できるのは、2年間専門コース及び関連する副科目を2年間続けて履修し、Reifeの試験を1級で合格し、必修の副科目の最終成績がすくなくとも3級以上の学生であった。卒業生のうち約半数がこの資格を得ている。この他に、優秀者には、楽友協会メダルや賞金があったが、こちらの方は延には授与されていない。

延は自ら〈ウィーンで過した五年間は随分と勉強致しました。ヴァイオリンピアノも一生懸命やりました〉¹³⁾と振り返って述べているが、世界でも一流の音楽院で、日本流に言えば「全優」の成績を伴っての卒業は、延の猛烈な努力を裏付けている。

なお、1894年4月には文部省より450円余の送金がなされている¹⁴⁾。

4 休学をめぐって

学籍簿に添付されたいくつかの手紙から興味深い事実がわかる。

まず日付は不明だが〈ウィーン音楽院総務課御中/幸田延は音楽史の授業の免除を請願する〉¹⁵⁾という手紙があり、さらに詳しい手紙が1892年11月付で書かれている。

ウィーン音楽院総務課御中

従順な署名者（延を指す）は今年度の音楽史の授業を免除していただけるようお願い申し上げます。その理由を申し上げることをお許しいただけるならば、署名者はドイツ語を未だ完全にはマスターしておらず、授業に列席しても成果が望めないからです。

さらに署名者は目下多少病んでおり、しばしば授業を中断するのやむなきに至ることがあります。

署名者はそれ故、このコースを来年に延期させていただけるようお願い申し上げます。

敬具

ウィーン、1892年11月6日、幸田延¹⁶⁾

手紙の余白に〈許可〉とある。つまり延は、語学力の不足と病気のため音楽史の受講の延期を願いでて許可されたわけだが、学籍簿によると他の授業も1月以降休学し、次年度再履修したことになる。この休学に関しては1893年3月になってミラノから請願の手紙が出されている。

ウィーン音楽院総務課御中

従順なる署名者は今年度の休学を許可していただけるようお願い申し上げます。その理由を申し上げることをお許しいただけるならば、署名者は、目下勉強を始める程健康を回復することがとうていできず、医師から一定期間田舎に滞在するよう忠告されたからです。

署名者はそれ故長期間の休学と、来年度（健康を回復した場合今年度直ちに）の復学をお願い申し上げます。

敬具

幸田延

ミラノ、1893年3月9日 目下ミラノ滞在中¹⁷⁾

この手紙は、ミラノの外科医による3月8日付のイタリア語の診断書と共に、3月15日付のウィーン日本公使館からの手紙に添付されている。診断書には、〈幸田延嬢は精神的に不安定で貧血気味なので、今のところ旅行できず、これからの何ヵ月間は勉強を再開することができない〉とある。公使館の手紙は、目下ミラノにいる幸田延から音楽院宛での請願の手紙と医者
の診断書が届いたので、それを回送する旨を記した事務的なものである¹⁸⁾。

これに対して、3月18日付の音楽院の回答は次のようなものであった。

幸田延嬢

音楽院生

ミラノ滞在中

ミラノ3月9日付の休暇の延長を求める貴殿の請願は以下のように受け入れられた。提出された医者の診断書に基づき、次年度1893/94に履修を続けること、すなわち新たな入学試験を受ける必要なく第2年次を繰り返すことは許可する。しかし、貴殿が、場合によっては今年度中に復学することについて許可を求めている点については、長期にわたって欠席し、そのため試験を受けられなくなったため、認められない¹⁹⁾。

この休学にまつわる一連の手紙はどう解釈したらよいのであろうか。

まず、延の病気が事実であったことは十分ありうる。診断書の内容が曖昧で病名ははっきりしないが、精神的に相当参っていた可能性は否定できない。延はサンフランシスコからポストンへ向かう汽車で激しい頭痛に苦しめられた経験もある²⁰⁾。この2例以外には生涯にわたって延の性格に病的な面を見ることは難しいが、日本音楽界を代表して留学しているという重圧に、20歳前後の少女が一時的に不安定になったのであろうか。初年度の成績を「1」で揃えるような、持ち前の頑張りが裏目に出て過労気味になったことは想像に難くない。特に、高度なドイツ語

が要求される音楽史の講義に、延は困惑し追いつめられたのかもしれない。

一方で、延は本当は病気ではなかったのではないのかという疑いも捨てきれない。たしかに心身共に消耗はしていたであろうが、療養に専念しなければならないほどであったら、どうやって再履修の音楽史で「1」を獲得することができたのだろうか。そもそもイタリア語の診断書はメモ書きのような書き方で、用語も平易であるし、外科医が書いたものであるため、正式な診断書ではないような印象を与える。病気は休学のための表面上の理由であって、延はその間ドイツ語や音楽史の勉強をしていたのではないか。延自身帰国後〈奥国に留学中、独逸地方または伊太利に遊びし事〉²¹⁾があったと、病を得ての静養とは受け止めがたい表現をしている。

その他にも、なぜ、いつ延がミラノに出かけたのか、また学籍簿上1月以降休学となっているのに、3月に休学を願い出る手紙が書かれているのはなぜか等、現在までの限られた資料ではいくつか疑問が残る。延は帰国後、イタリア歌曲を原語で歌うなど、声楽をしばしば披露している。ウィーン音楽院で声楽を学んだ形跡はないので、ミラノで声楽の勉強をした可能性もある。

5 華麗な音楽生活

この章では延の教師たちや、延の留学当時のウィーンの音楽事情を紹介する。特に重要と思われる作曲のフックスとヴァイオリンのヘルメスベルガーについては、その頃の音楽生活や雰囲気をも具体的に知るために、許される限り詳しく述べたい。

ローベルト・フックス²²⁾

1847年オーストリアのフラウエンタールで生まれた。父は教師かつオルガニストであった。教会音楽を中心とする作品も残しており、シューベルトの前で、シューベルトの歌曲を歌う歌手の伴奏をしたこともある。子供たちにも音楽を愛好する者が多く、中でも兄のJ.ネーポムク²³⁾は指揮者として活躍、ウィーン音楽院作曲科教授（1988年）から、同院院長まで登りつめた（延の在学中の1893年）。ローベルト自身は音楽の手ほどきは義兄²⁴⁾から受けた。7歳からオルガン・ヴァイオリン・フルート・通奏低音などを学んだ後、教師の道を歩むべくグラーツの実業高校で教員資格を取るかたわら、オペラの伴奏や、歌曲・ピアノ曲の作曲に励んだ。ウィーンで音楽を学び、指揮者としての生活をスタートしていたネーポムクや友人の影響を受け、ウィーン音楽院の作曲科に入学、デッソフ²⁵⁾に師事した。当初経済的に苦しく、伴奏者や教会のオルガニストとして生計を立てながら、2年間で卒業試験に合格した（さらに2年間聴講生）。同じ頃作曲科ではニキシュが学んでいた。在学中の精力的な作曲活動は、1872年デッソフの指揮するウィーン・フィルによって、彼のト短調交響曲が演奏されるという、華々しいデビューとなって実を結んだ。74年弦楽セレナード（作品9）で幅広い成功を取めたフックスは、75年

音楽院の和声学の教師となり、数年後ブラームス²⁶⁾の推薦で教授に昇進、音楽理論や対位法も教えた。リヒャルト・ホイベルガー²⁷⁾、フーゴ・ヴォルフ、グスタフ・マーラー、アレクサンダー・ツェムリンスキー²⁸⁾、レオ・ファル²⁹⁾、フランツ・シュレーカー³⁰⁾、フランツ・シュミット³¹⁾等、ウィーンの若い作曲家のほとんどが彼に師事している（シベリウスも1890年に彼のもとで学んでいる）。1875/76年には楽友協会附属オーケストラの指揮者も勤めた。作曲家としての彼の活動は実に精力的で、ハ長調交響曲（作品37）は、ベートーヴェン賞を受けている。オペラもあるが、中心となるのは室内楽曲と、独奏・連弾用ピアノ曲である。

彼は、デッソフより、心酔していたベートーヴェンや、家族揃って敬愛していたシューベルトの影響を強く受けたとされる。また1870年代後半ブラームスと親交を得てからは、彼にも大きく影響された。ブラームスは、当時第1交響曲も成功を収め、既に作曲家としての地位を確立したウィーンの名士であったが、フックスが気に入って、リハーサルや初演に立ち会ったり、音楽院での昇進に力を貸したり、交響曲をはじめとする多くの作品の出版を働きかける手紙をしばしば出版者に送るなど、よく面倒を見た。フックスの方も、ブラームスの音楽、特に《ハイドン変奏曲》などに夢中になっており、ブラームスの死（1897年）後も好んで彼の作品を演奏した。

フックスの作品の魅力は、次のブラームスの言葉に最も端的に表れているだろう。〈フックスはさすがに素晴らしい作曲家だよ、どの部分も洗練されて、つぼを心得た魅力的なものになっている。始めから終わりまでいつも楽しめる〉³²⁾、あるいは、〈ローベルト・フックスの実に音楽性にあふれる才能や、彼の作品に見られる美しくも自然な簡潔性、優美さや愛らしさについては詳しく述べる必要はないと思います〉³³⁾。また、ハンスリックの評：〈曲（オペラ《Königsbraut》）のいたるところに、愛すべき、信頼のできる作曲家の姿が見える。彼は、気どりとか陳腐さを好まず、幸運にも、よく練られた優美さや繊細な感性を自分のものになっている〉³⁴⁾。

フックスの曲には、極端な半音階や調性からの逸脱は見られず、激しい感情のドラマティックな表現というものもない。特に、シューマンの小曲集形式を受け継いだピアノ曲に顕著に見られるように、ロマン派の息吹を伝える抒情詩人であり、細部まで神経の行き届いた趣味のよいエレガントなスタイルによって、〈中庸の時代〉³⁵⁾に生きるウィーン人の人気を集めることとなったが、逆に歴史的に言えば、個性に乏しく、〈19世紀末のウィーン派の中でも最良のドイツ家庭音楽の作曲家〉³⁶⁾にとどまった。

性格も遠慮深く温厚であったようで、授業は厳しい規律の中にも、寛容で、明るく自由な雰囲気支配していたと言う。

フックスは1927年にウィーンで亡くなり、敬愛するシューベルト、ベートーヴェンの眠る中央墓地に埋葬された。

さて延に戻ると、1890年延が来澳したとき、フックスは既に作曲家として名を成していたし、音楽院でも重鎮であった。おりしも90年代前半は、ツェムリンスキー、レオ・ファル、フラ

ンツ・シュレーカー、フランツ・シュミット、シベリウス等を教えて、彼の教授生活の中でも最も充実した時期を迎えていた。延はプライベートにもローベルト・フックスの対位法・作曲法のレッスンに通ったと言っている³⁷⁾。延がフックスの指導のもとで作曲した作品については後述する。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー（息子）³⁸⁾

慎み深く穏当な人生を送ったフックスに比べ、ヨーゼフ・ヘルメスベルガー（息子）のそれは実に波乱万丈であった。

祖父のゲオルク³⁹⁾は高名なヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ベーム⁴⁰⁾の弟子で、既に1821年彼の助手となり、1833年ウィーン音楽院の教授の地位を得た（1867年まで）。門下からヨーゼフ・ヨアヒム⁴¹⁾を出している。1830-67年宮廷歌劇場のコンサートマスター（指揮者）、また1842年ウィーンフィルハーモニー・コンサートの創始者の一人となり、指揮者を務めた。作曲も手掛けている。ウィーン・ヴァイオリン楽派（Wiener Geigenschule）の祖と言われる。その息子ヨーゼフ（父）⁴²⁾は音楽院で父からヴァイオリンを学び、17歳で宮廷歌劇場オーケストラのソリストとなった。1850-59年楽友協会オーケストラ芸術監督兼指揮者、1860年宮廷歌劇場コンサートマスター、1877年宮廷楽団楽長。また1851-77年音楽院教授（生徒にニキシュがいる）、1851-93年同院長⁴³⁾（延の在学中死亡、後任はフックス兄）となった。1849年にはヘルメスベルガー四重奏団を結成して、ベートーヴェンの後期の室内楽曲や、シューベルト作品の普及に貢献した。早くからブラームスのよき理解者であった⁴⁴⁾。ウィットに富んだ社交的な人物で、ウィーンきっての著名人であった。

その子供ヨーゼフは、父と区別するためペーピ（Pepi）という愛称で呼ばれていた。1855年にウィーンに生まれ、音楽的にきわめて恵まれた家系・環境の中で育った彼は、8歳から音楽院のコンサートに出演、12歳で指揮、15歳のとき、父の主宰するヘルメスベルガー四重奏団で第2ヴァイオリンを務めるようになるという神童ぶりを示した。1878年宮廷楽団・宮廷歌劇場オーケストラのソリスト、音楽院教授、1884年宮廷歌劇場コンサートマスター、1890年宮廷楽団楽長となった。1891年ヘルメスベルガー四重奏団の主宰を父から引継ぎ、1901年にフィルハーモニーの常任指揮者（マーラーの後任）に呼ばれるに至って、その栄光の頂点を極めたと言えよう。一方数々の自作のオペレッタも次々とヒットさせている。ところがこの時代の寵児も、1903年に、女性がらみのスキャンダルで、あらゆる地位を失ってしまう。オペレッタの成功などで挽回したものの、1907年かつては「王子ペーピ」と謳われたヨーゼフ・ヘルメスベルガーは失意のうちにウィーンで没した。彼の弟フェルディナンドはチェリストとして、音楽院の教授、フォルクスオーパーの楽長等を務め、ヘルメスベルガー四重奏団の一員でもあった。

ヨーゼフは、作曲家・演奏家としての活躍が注目を浴びるためか、どのような教師であった

のかがはっきりしないが、ヴィルトゥオージティにあふれる華麗で軽妙な演奏スタイル、豊富なレパートリーは、延の憧れであったに違いない。帰国後まもなく、延はメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲ホ短調》を披露した。〈糸おす指頭に満身の熱をたゝへて自ら其霊音に心奪はれしかと思はれいひ知らぬ細かき離れ業の自在なる（後略）⁴⁵⁾という上田敏の評に、ヘルメスベルガーの指導を見る思いがする。

もう一人の副専攻の和声学を教えていたグレーデナーは同音楽院で学び、1877-1913年音楽理論を教えていた。ウィーン大学でも教鞭をとっている。ジングアカデミー等で指揮もし、ブラームス風の作曲も残している⁴⁶⁾。

フリーデリケ・ジンガー⁴⁷⁾とウィーン女性音楽教師協会

ピアノを担当したジンガーについては、ほとんど資料がないが、ウィーン楽友協会所蔵の学籍簿と、ウィーン国立音楽大学資料室所蔵職員録によると、音楽院でアントン・ドーア⁴⁸⁾のもとでピアノを専攻した後、1874年から副科のピアノを教えている。1909年音楽院が、国立のウィーン音楽アカデミーに昇格した後もそのまま勤務し、1918年まで勤めている。

19世紀半ばピアノの性能は格段の進歩を遂げ、ヴィルトゥオーゾの演奏が、聴衆の熱狂を呼んでいた。それと共にピアノへの関心が高まり、ピアノは一般家庭に常備されて、いわば良家の子女の嗜みとして定着し、家庭音楽と呼ばれるアマチュア音楽家向けの曲や、管弦楽曲のピアノ用編曲が数限りなく出版されるようになった。

ジンガーは音楽院での仕事の他に、個人的にもピアノ教室を持っていたようである⁴⁹⁾。彼女は、そのような女性音楽教師が集う女性音楽教師協会⁵⁰⁾のメンバーである。この協会は、ウィーン音楽院出身の女性音楽教育家が1886年に創立した団体で、個人の職業音楽家たちに年金保険・健康保険・休暇保険などの社会保障制度をつくり、男性並みの報酬も決めた。音楽会もしばしば主催している。当時女性が演奏できる楽器は、ピアノや声楽からヴァイオリン、のちに他の楽器（チェロ）などへと広がっていきつつあったが（チェロは1910年頃でも女性が弾くのは非常に珍しかった）、その広がりにも協会が寄与していた。延がジンガーに師事していた時点で、ジンガーが既にこの団体に加入していたかどうかは不明だが、音楽院関係者でこの協会のメンバーだった人は他にもいるので、延がウィーン的女性音楽家が自立をめざす過程を目にしていた可能性はある。

ウィーン音楽院と音楽界

このころの音楽院は生徒の顔ぶれも豪華である。作曲ではツェムリンスキー、レオ・ファル、ヴァイオリンでは教師が違うがフランツ・シュレーカー、ヘルメスベルガー（弟）にチェロを学んでいたフランツ・シュミット（前述したように彼らは皆フックスの門下でもある）が在籍

していた。ただし、いずれも延の入学の頃卒業したり、クラスが違ったりしていて、直接延と交流があったとは考えにくい。わずか9歳で音楽院に入学し、やはりヘルメスベルガーにヴァイオリンを師事していた（学年は延が1年下）エネスコ⁵¹⁾との接点が一番可能性が高い。1932年にウィーンでのヴァイオリン・コンクールに審査員として出席した妹の安藤幸は、〈審査員の中には、昔姉が維納に留学していた頃、やはりそこにおられ、今でも姉を覚えていてその安否を問われた方がありました。それが何とエネスコ氏であったのには嬉しく驚いてしまいました⁵²⁾と記している。

1890年から1895年頃のウィーンはまさに世紀転換期を迎えて文化の爛熟期に向かっており、文学ではシュニツラー、美術ではクリムト等が活躍していた。音楽界も非常に充実していた様子は、例えば90年頃について書かれた次の文章からも窺うことができる。〈運がいいときには、ブラームスが音楽協会大ホールでオルガンの練習をしていたり、ブルックナーが即興的に弾いたりしているのを聴くことができたし、ネーポムクとローベルトのフックス兄弟や、二人のヘルメスベルガーに会うこともあった。（中略）また、ホールに滑り込んで、ハンス・リヒターがフィルハーモニーのプロローベをしているのをこっそり聴くこともできた⁵³⁾。

当時ハンス・リヒター⁵⁴⁾はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者で 延は彼の指揮でベートーヴェンの第5交響曲を聴き、〈この世にこんな立派な音楽があるのかと、思わず泣いて仕舞いました⁵⁵⁾と、のちに感激を述べている。

また宮廷歌劇場ではヴィルヘルム・ヤーン⁵⁶⁾、ハンス・リヒター、J. N. フックス、J. ヘルメスベルガー（息子）が指揮しており、ディットリヒも1894年帰国後一時期この歌劇場オーケストラに所属していた。延はここでワーグナーの《ローエングリン》（リヒターの指揮）を見たこと記している⁵⁷⁾が、もちろん他にも多くのオペラ上演を訪れたに違いない。

他にはクナイゼル四重奏団⁵⁸⁾や声楽家のパッティー⁵⁹⁾の名を後に挙げている。

延は帰国後、ウィーンの音楽会事情として、フィルハーモニー（及び指揮のハンス・リヒター）、楽友協会、ヘルメスベルガー四重奏団などの室内楽団、合唱団（ジング・アカデミー他）などを紹介している⁶⁰⁾。フィルハーモニーでは、演奏者が一流で、リヒターの指揮が非常に優秀であること、演奏が主に管弦楽曲に限られ（合唱曲は演奏されない）、また各国の一流演奏家の客演の場や若手演奏家の登龍門となっている点を指摘している。かなりの字数を割いて、マナーの厳しさ（コート類は預ける、演奏途中での入場や私語は不可）を説いているのも、逆に帰国当時の日本の演奏会の騒然とした様子が窺えておもしろい。拍手のみで、在日外国人のように杖や足で床を踏み鳴らすことはないとも言っている。楽友協会ともども編成が大きいことを強調している。また、演奏会があらかじめよく打ち合わされて変更のないのに感心しているのは、日本では時間・プログラム共に変更が多かったからであろう。

延は、明治30年の談話で、〈二三十年前までは、維也納（Wien）が、音楽では、世界一だつたんですが、其後独逸の方が非常に進歩したものですから…今では…音楽の中心がヴ井ンからベリンに移つたという程でもありませんが…昔よりは余程衰へました。然し（中略）矢張

リヴ井ーンは音楽の檜木舞台で、今でも独逸などに行つて…まさかベリーンでは、そんなこと
 もありませんが…ヴ井ーンで歌つてきたと言へば、仲々はばがきゝます。兎に角、ベートーフ
 エンもこゝに居りましたし、これまでもなく、その後もないといはれる、作曲大家のシューベ
 ルトは、ヴ井ーンで生れて、ヴ井ーンで死んだ人だし、…それからモツアヴトも居りましたし、
 それからこの四月に亡くなりましたブラムスなんかも居りました。そうして一体ヴ井ーンとい
 ふ所は、音楽の市といつても善い位で、仲々一般に音楽趣味の高いところす⁶¹⁾と、ベルリ
 ンの台頭を視野に入れつつも、ウィーンの音楽の都ぶりを強調している。また近頃一番の音楽
 家としてブラームスを挙げている⁶²⁾。

6 ローザ・フォン・ゲロルト⁶³⁾

当初は前述したように言葉で苦勞したが、到着時は戸田伯爵の一家、後にはローザ・フォン・
 ゲロルトなる夫人と交友を結び、彼らはいずれも大いに延を助けた。特にゲロルト夫人は、遙
 かな東洋から来たこの小さな少女に実に親切にしてくれたらしい。弟の成友は次のように書い
 ている。(姉は同市(ウィーン)の上流夫人ローザ・フォン・ゲロルト夫人と相知るに至つた。
 夫人は明治六年同地で開催せられた万国博覧会に於て、日本の出品物を一覽してより、無類の
 日本蟲貞となつたが、爾来日本人の奥国を漫遊する者甚だ少く、殊に婦人の如きは殆ど皆無で
 あつたため、折角の熱情を吐露する機会にさへ恵まれていなかった。それ故姉の入市を知るや、
 早速公使館を介して会見を求め、忽両者の間に水魚の交を訂するに至つた次第である。海外万
 里の異域に在留する者が、兎もすれば郷愁病に罹り易いのを反し、姉は夫人の奨励により、始
 終元気で愉快に勉強したのみならず、夫人の懇切な紹介によって同家に往来する人々とも相識
 り、上品な独逸語を自由に操縦し得るに至つたは、学校以外の大きな教育であつた⁶⁴⁾。

ローザは1830年テューリンゲン生まれ、1853年に裕福な出版業者モーリッツ(Moritz)と
 結婚した。著名な芸術家が集まるサロンを主宰し、自身も各地を旅行して紀行文を出版した
 ジャーナリストであつた。子供はいなかった。

延は同夫人から〈ヴァイオリニストはもっと良い楽器を持っては⁶⁵⁾と真正のアマー
 ティのヴァイオリンをもらって驚いたと言う(その頃延が持っていたのはアメリカで買ったド
 イツ製のものであつた)。それもそのはず、本物のアマーティは、種類も多いがきわめて高価
 なヴァイオリンで、当時は楽器の価格が今程ではなかつたとはいえ、無償で譲渡されたとし
 たらにわかに信じがたい話である。しかも帰国後ほうほうはがれてきたので3回ほど外国に修理
 に出した後、これまた高価なりュポーに替えてもらい、今度はつぼが手より大きすぎるので3
 度目に送ってもらつたのを昭和6年の段階で使用していると書く。よほどかわいがられてい
 なければありえないことである。⁶⁶⁾

夫人の率いる音楽愛好家の合唱団でアルトを受け持ったとも書いている。19世紀ヨーロッ
 パではアマチュア合唱団が大流行し、ウィーンでも19世紀半ばに「楽友協会」の合唱団や合

唱協会が設立された。これらの合唱団はアマチュアとはいえほとんどプロ化しており、プロのオーケストラが演奏会で合唱を伴う曲を演奏する場合に共演している。この合唱運動に伴い、特に資産階級やいわゆる「良家の子女」を対象にした合唱団も多く結成された。夫人の合唱団もその一つであると思われる。延はのちに、皆が初見ですぐ合唱できることに驚き、また人々との音楽に関する話からずいぶんいろいろなことを学んだと、懐かしく振り返っている。⁶⁷⁾

ウィーンでブラームスの好きな金持ちのおばさんがいて、彼女のところでよく聴かされてブラームスを覚えたと言っているのも、ゲロルト夫人を指すと思われる。当時ウィーンはシュトラウスのワルツを中心にダンスに明けダンスに暮れていたようだが、彼女の開く月に1度の家庭舞踏会で、延も袖のふくらんだドレスを着て踊ったと言う。⁶⁸⁾

延の遺品には、夫人のウィーン郊外ノイヴァルディクの別荘リンデンホーフ Lindenhofで、夫人と数人の知人を撮影した写真が残る。

延はゲロルト夫人が1907年に亡くなるまで、よく文通し、のちのちまで彼女の厚誼に感謝していた。

7 交友関係と生活

当時の延の交友関係を知る資料の一つに、幸田成貴氏所蔵の遺品に残る記念帳⁶⁹⁾がある。延はウィーンで調達したと思われる革張りのノートに、知人に記帳してもらっていた。延はこのノートを日本にいるときも、また2回目の渡欧の際にも、サイン帳として使い続けた。

延自身が「金蘭簿」と呼ぶこのノートは、1894年12月1日の音楽家エックハルト (Julius Egghard)⁷⁰⁾のサインに始まり、次の見開きの右ページを、オーストリアで当時著名だった風景画家フィッシャー (Ludwig Hans Fischer) が精密な風景画で埋めている。以下、ゲロルト夫人はもちろんのこと、彼女のサークルでの知り合いと思われる人物たち、ヘルメスベルガーをはじめとする教師陣 (ヘルメスベルガーは延を〈私の最もすばらしい才能にあふれた生徒〉と呼んでいる)、学友フォン・プランク (Elsa von Plank)⁷¹⁾たちが、記念の詩句とサインを寄せている。

このノートによって、彼女が、宮廷顧問の娘でピアニストになったデメリウス (Margarete Demelius 女性音楽教師協会のメンバー)⁷²⁾や、フォン・ヴィヴェノート (Annette von Vivenot)⁷³⁾、フォン・クノル (Josefine von Freiherr Knorr)⁷⁴⁾といった、ウィーンの上流階級の女性たちと交流があったことが窺える。延は、ヴィヴェノート家の娘アネッテと共に、アネッテの親戚にあたるクノル夫人が所有するシュティーバ城 Schloß Stiebar を帰国間際の1895年8月末に訪問し、そのとき二人から記帳してもらった。

また、延は明治42 (1909) 年11月から43年7月まで再渡欧し、ベルリンを中心としてヨーロッパの音楽事情を視察するが、その間克明な日記⁷⁵⁾を残している。その折1910年3月から4月にかけてウィーンを再訪し、オーストリア・ハンガリー帝国音楽アカデミー (この年ウィーン

音楽院から改組された)の授業を参観するかたわら、多くの人に面会しているが、その大半が、1回目のウィーン留学のときの知己であったと考えられる。ゲロルト夫人やクノル夫人は既に亡くなっており、ヴィヴェノート家のアネッテは(亡くなったか国外にいるかは不明だが)不在であった。ディットリヒやジンガーはアカデミーで教えており、彼らやデメリウスとは頻繁に会って、旧交を温めている。ローベルト・フックスにも再会した。老教師は非常に愛想よくかつての教え子を迎えたという⁷⁶⁾。

これらの資料から、おそらくゲロルト夫人の尽力であっただろうが、延はウィーンで、音楽院関係の音楽家だけではなく、芸術家や上流階級の人々と知己を得、かなり社交的な生活を送っていたことが想像できる。

8 ヴァイオリン・ソナタ

幸田成貴氏のもとに残る延の遺品の中には、手書きのピアノ伴奏つきヴァイオリン・ソナタの楽譜が2曲ある⁷⁷⁾。片方は1楽章形式で《Sonate für Violin und Klavier von Nobu Koda》と題され、ヴァイオリンとピアノの楽器指定がある。もう一つは3楽章形式でタイトルも署名もない。

3楽章形式の曲は2楽章の終わりに〈Wien, 95〉とあり、フックスの指導のもとに作曲された習作と推測される。この曲には楽器の指示がないがソロ・パートに和音が使われているなど、弦楽器を想定していること、音域的にもヴァイオリンで無理がないので、ヴァイオリン・ソナタに間違いはないと考える。第1楽章Es-Dur、第2楽章G-Dur Adagio、第3楽章Es-Dur Allegro (Rondo)となっているが、第3楽章には未完成部分があり、後半は散逸している。完成部分を全部合わせても15分前後の小曲であるが、のびのびとさわやかな第1楽章、優雅な第2楽章、軽やかな第3楽章、いずれも当時盛んに作曲されたLaienhausmusik (アマチュア家庭音楽)的な魅力がある。〈当時のウィーン音楽院は全く保守派の殿堂であって、ヘルメスベルガーの優雅な伝統が守られており、「古典的伝統のよき古きウィーン」の根城であった。〉(1875年頃)⁷⁸⁾という雰囲気、延の留学当時も色濃く残っていた様子を反映するような曲である。もちろん転調の処理など作曲技法上未熟な点の多い、単調な曲であることは事実で、また、1895年にはマーラーが第2交響曲、リヒャルト・シュトラウスが《死と変容》を完成していることを思えば遙かに時代遅れのスタイルであるが、音楽取調掛設置後わずか15年ほどの段階のレベルとしてみれば、相当な域に達していると言えよう。この曲は日本人初のソナタ形式による器楽曲であると考えられる。

もう一つの手稿譜も最後数小節が未完成である。d-mollのせつせつとしたロマン的なソナタ形式の曲で、3楽章形式のものに比べ完成度が高く、曲の様式も新しいので、作曲は3楽章形式のものより後と考えられるが、こちらには作曲年代が記入されていないし、3楽章形式の曲とは五線紙も異なっているため、ウィーン時代のものかどうかは断定できない。

延の帰国後の明治30年6月「学友会演奏会」で〈バイオリン及びピアノ(合奏) 賛助員

幸田幸子/同 鈴木フク子/名誉員 幸田延子/演奏 ソナタ 幸田延子 作曲⁷⁹⁾が演奏された。延は同年10月発表の談話で、次のように述べている。〈せんだつて学友会に出しましたソナタ……あれは稽古中に、あつちで作つたもので、極つまらんです。……然し、どうかして、あんな具合に出来たんで……いつでも、作曲の稽古のときに、先生が何か作くつて来いと申しますので、持つていかなければなりません、いつか、あんなものが出来て、次の日、先生に見せましたら、よく出来てるつて、大変に褒めて……少し直してくれました。それですから……なんだか知りませんが……先生の褒めてくれたんですから、いゝと思つています。……ついせんだつて出しました。然し今ではどうかと思つて、筆を入れたところもないではありませんが、先生の訂正^{なほ}してくれただから、蛇足だらうと思つて、ほつておきますんです。〉⁸⁰⁾

瀧井敬子は、このとき演奏されたのは〈Wien, 95〉と記入のある3楽章形式の曲で、完成している1楽章と2楽章を二人のヴァイオリニストがそれぞれ一人ずつ演奏したとしている⁸¹⁾。遺品に残されていない作品があるかもしれないし、1楽章形式の曲をヴァイオリン二人で演奏するという可能性も完全には否定できないため断定はできないが、現時点の資料で判断するならば、3楽章形式の曲が演奏されたと考えるのが妥当であろう。

9 おわりに

明治25(1892)年に出版された『明治閩秀美譚』の幸田延の項に、兄幸田露伴が編者鈴木光次郎に延について書き送った書簡が掲載された。その中に当時延が露伴に送った手紙が引用されている。〈音楽院の都合もよろしく三ヶ月毎に試験あり候ところ此度の試験にて皆一の点を取り申候わたくしバイオリンの組中にて第一ばかり取りしは私一人他の人はバイオリンーにてもピアノまた和声学にて第二或は三など取り申候(中略)当府在留の日本人一同無事しかし当地は日本人少く淋しき事に御座候がまた一方より申せば却つて修業の為めよろしく候〉⁸²⁾

このように充実した修業のすえ1895年7月6日に音楽院を卒業した⁸³⁾延は、9月中旬までウィーンに滞在し、スイス経由(ジュネーブでは湖水風景を嘆賞した)で34時間かけてパリに到着した。パリでは、《アイダ》を鑑賞、パリのオペラの盛大さ、オペラ座の建物の美しさを特記している。バルサイユ宮殿では、マリー・アントワネットの悲劇に思いをはせた。9月28日パリを發ち、29日にはマルセーユを出航した。アデンーコロンボーシンガポールーサイゴン(ホーチミン)ー香港を経て、11月2日上海到着、フランス船Yarra号⁸⁴⁾で、長崎、神戸を経て、横浜へ帰港したのは11月9日であった。音楽学校の人々や家族が迎えに来ており、中には初対面の人もいたという。新橋でも音楽学校の教師生徒の出迎えを受け、帰宅した⁸⁵⁾。翌月12月3日には、母校(当時高等師範学校附属音楽学校)教授に任命されている⁸⁶⁾。

日本の音楽界は彼女の留学中から帰国を待ちわび、彼女もその期待に応じて、帰国後は演奏家として、教育家として、日本の音楽界を牽引した。帰国から明治32年頃までの延の活躍や彼女の演奏に対する批評、そこに見られる延の留学の意義については、既に論じた⁸⁷⁾ので、こ

ここでは省略するが、その中で、筆者は、延の帰国が日本の音楽界に強い刺激を与えた一方、延は留学によって絶大な「権威」を得、この権威に対する反発が、のちの延排斥へとつながっていくという図式を提案した。

何より、延が、当時の欧米の音楽状況をライブで体験し、それを持ち帰ったということが、洋楽導入の途についてまだ間がない日本の音楽界に与えた影響は計り知れない。同じように、ウィーン的な音楽のスタイルが、当時ウィーンに集まった音楽家たちによって、日本をはじめヨーロッパ各地やアメリカに広まったという現象は、音楽の同時代性を知る上でも興味深く、この点についてさらに考察することを今後の課題としたい。

注

- 1) 原文ひらがな部分はカタカナ、幸田成貴氏所蔵資料。
- 2) 幸田延 「外行記要」『同聲会雑誌』第1号 1896年、25頁。
- 3) Dittrich, Rudolf (1861 -1919) ウィーン音楽院卒。ヴァイオリン・オルガン奏者、作曲家。明治21年-27年(1888-1894)東京音楽学校に在職し、ヴァイオリン、和声学、作曲法などを指導した。
- 4) 慶應3(1867)-昭和11(1936)年。比留間は私費留学で明治20年から22年をアメリカで、22年から24年を欧州で過ごしている。マンダリンの導入と普及活動で有名。
- 5) 文久2(1862)-昭和20(1945)年。明治17年から32年までドイツに留学し、22年に純正調の理論及び純正調オルガンを発表した。帰国後は邦楽研究・日本舞踊の普及に努めた。
- 6) 幸田延「外行紀要」、26頁。
- 7) とだ うじたか 嘉永7(1854)-昭和11(1936)年 伯爵。1887-1890年オーストリア・ハンガリー・スイス8代目全権公使、ディットリヒを日本に斡旋した人物でもある。ハインリッヒ・フォン・ボクレット編『日本民謡集』(1888年)の献呈を受けたことで知られる。
- 8) 幸田延「外行紀要」、25-26頁。なお、このころ、戸田一家とともにSängerfest(役者などが花車に乗って街を練り歩くお祭り)を見物した際に、著名なベート(歌手Lola Beeth)に菓子をもらったが、名前を後から知ったため、残念な思いをしたというエピソードも記している。ベートとは、1909年からの2回目の渡欧の際ベルリンで改めて懇意になるが、この時点ですでに接点が生まれていたわけである。
- 9) 幸田延「外行紀要」、26頁。
- 10) 幸田延 「私の半生」『音楽世界』第3巻第6号 1931年、39頁。ウィーン音楽院はカールスプラッツ(Karlsplatz)に所在した。
- 11) Schul-Statut des Conservatoiums für Musik und darstellende Kunst。
原文は〈Violinstudien für Frauen nur bei hervorragender Begabung. Kein Orchester〉。
- 12) Statistischer Bericht über das Conservatorium für Musik und darstellende Kunst。
- 13) 幸田延 「私の半生」、39頁。
- 14) 幸田成貴氏所蔵資料送金通知書。
- 15) 原文を挙げる。
An die Löbliche Direction des Wiener Conservatoriums
Nobu Koda
bittet um Dispens vom Unterrichte in Geschichte der Musik
- 16) 原文を挙げる。
Löbliche Direction des Wiener Conservatoriums!

Ergebenst Gefertigte bittet um Dispens vom Unterrichte in Geschichte der Musik für das laufende Schuljahr und erlaubt sich, ihre Bitte damit zu begründen, daß sie der deutschen Sprache noch nicht vollkommen mächtig ist, um dem Unterricht mit Erfolge beiwohnen zu können
Gefertigte ist überdies derzeit etwas leidend, so daß sie öfter gezwungen ist, den Unterricht zu unterbrechen.

Unterzeichnete bittet daher, den Besuch dieses Courses für das nächste Jahr verschieben zu dürfen.

Hochachtungsvoll

Wien, am 16. November 1892. Nobu Koda

(leidendの左に Genehmigt.)

17) 原文を挙げる。

Löbliche Direction des Wiener Conservatoriums! Erh: No 109/1893

Ergebenst Gefertigte bittet um Urlaub vom Schulbesuch für das laufende Schuljahr, und erlaubt sich, ihre Bitte damit zu begründen, daß sie ihre Gesundheit absolut nicht herstellen kann, um ihr Studium derzeit anzufangen, und ihr vom Arzte einer zeitlange Aufenthalt auf dem Lande gerathen wurde.

Unterzeichnete bittet daher um längeren Urlaub von Schulbesuch, und bittet, daß sie im nächsten Schuljahr, auch noch in diesem laufenden Schuljahr sofort sie ihre Gesundheit herstellen kann, die Schule besuchen zu dürfen.

Hochachtungsvoll

Nobu Koda

Mailand, den 9. März 1893. derzeit Mailand

18) それぞれ原文を挙げる。

Milano

Il sottoscritto, dichiara che la Signorina Nobo Koda é affetta, da turbe nervosa ed anemia, quindi per il momento non può imprendere un viaggio e per alcuni mesi ancora non potrà ripigliare nessun studio.

Cav. Profess. G. Albertini

Chirurgo Primario all'Ospitale

Maggiore die Milano

8.3.93

Légation du Japon à Vienne.

Wien, den 15 März 93.

An die löbl. Direction des Conservatoriums für Musik.

der Unterzeichnete erlaubt sich, der löbl. Direction des Conservatoriums für Musik in der Anlage ein Gesuch sowie ein ärztl. Zeugniß mit dem ergebenen Befügnis(?) zu übermitteln, daß Ihnen(?) diese beiden Schriftstücke von Seite des Frl. Nobu Koda, d. Z. in Mailand, zugegangen sind.

T. Takasugi

Chancelier à la Légation du Japon

I Fichtegasse 2

19) 原文を挙げる。「?」は読みが未確定, 点線は判読不能であることを示す。

Wien, am 18 März, 1893

Fräulein Nobu Koda

Conservatistin

derzeit in Mailand

Ihrem Ansuchen de dato Mailand den 9. März um weiteren Urlaub wurde insoweit Folge gegeben, als

Ihnen auf Grund des beigebrachten ärztlichen Zeugnisses gestattet wird, im kommenden Schuljahr 1893/94 Ihre Studien fortzusetzen bzw. ohne eine neuerliche Aufnahmeprüfung ablegen zu müssen, den II. Jahrgang zu wiederholen. Dagegen wurde Ihre Bitte, eventuell noch in diesem Schuljahr die Studien aufnehmen zu dürfen, mit Rücksicht auf das langandauernde Versäumnis und die hierdurch bedingte Unmöglichkeit einer Prüfungsablegung als unzulässig abgewiesen.

Für die Leitung des Cons(?) d.....

der Gen. Sec.

der

18./III.

20) 幸田延「外行紀要」24頁。

21) 幸田延「外行紀要」27頁。

22) Fuchs, Robert (1847-1927) フックスの経歴については、以下を参照した(人物の出典については、事典、辞典の類は割愛する。以下同じ)。

Josef Lorenz Wenzl: *Robert Fuchs*, Neue Musikzeitung 43, 1922

Anton Mayr: *Robert Fuchs*, Neue Musikzeitung 38, 1917

ibid: *Erinnerungen an Robert Fuchs*, Leuschner & Lubensky, Graz, 1934

Karl Brachtel: *Robert Fuchs*, Neue Musikzeitschrift i /4,1947

また教員の動向は、以下を参考にした。

Kaiserlich=königliche Gesellschaft der Musikfreunde: *Geschichte des kaiserlich=königlichen Gesellschaft der Musikfreunde in Wien 1870-1912*, Wien, 1912

Ernst Tittel: *Die Wiener Musikhochschule: Vom Konservatorium der Gesellschaft der Musikfreunde zur staatlichen Akademie für Musik und darstellende Kunst*, Elizabeth Lafite, Wien, 1967

23) Fuchs, Johann Nepomuk (1842-1899)。

24) 姉Marieの夫Martin Bischof (1812-1883), 51年間Oberschule(高等学校)の教師であった。

25) Dessoff (Dessauer), Felix Otto (1835-1892) フィルハーモニー演奏会の指揮で、ハンスリックによって推奨された指揮者でもあった。(Eduard Hanslik: *Geschichte des Concertwesens*, ii: *Aus dem Konzertsaal*, Wilhelm Braumüller, Wien, 1870, 388頁)。

26) 1877年頃サロンでブラームスがフックスのピアノソナタを聞いたりするうちに親しくなった。79年作曲の作品22のピアノトリオはブラームスに捧げられている。

27) Heuberger, Richard Franz (1850-1914) 指揮者・作曲家・音楽評論家, 代表作《Der Opernball》。

28) Zemlinsky, Alexander von (1871-1942) 作曲家・指揮者, シェーンベルクの師, 代表作《抒情交響曲》, フックス兄に作曲, 弟に対位法を学ぶ。

29) Fall, Leo (1873-1925) 指揮者・作曲家, オペレッタを多く残す。

30) Schreker, Franz (1878-1934) 作曲家・指揮者・教師(クルシェネク等を育てた)。代表作《遙かな響き》。

31) Schmidt, Franz (1874-1939) 作曲家・チェリスト・ウィーン音楽院院長, 代表作に4つの交響曲。

32) Heuberger: *Erinnerungen an Johannes Brahms*, Hans Schneider, Tutzing, 1971, 48頁。

33) ブラームスのアブラハム宛ての手紙, 引用はFranz Hagenbucher: *Die Original-Klavierwerke zu Zwei und Vier Händen von Robert Fuchs*, Dissertation, Uni. Wien, 1940, 26頁。

34) Hanslik: *Musikalisches und Literarisches*, der Allgemeine Verein für Deutsche Literatur, Berlin, 1889, 99頁。

35) ibid, 102頁。

36) Hagenbucher, 前掲, 103頁。

37) 幸田延「私の半生」, 39頁。

38) Hellmesberger, Joseph (d. J.), (1855-1907) ヘルメスベルガー一族については以下を参照した。

Jodok Freyenfels: *Mahler und der „forsche Pepi“*, Neue Zeitschrift für Musik, 132/4, 1971

- Robert Maria Prosl: *Die Hellmesberger*, Gerlach u. Wiedling, Wien, 1948
- 39) Hellmesberger, Georg, (1800-1873)。
40) Böhm, Joseph (1795-1876) ヴァイオリニスト・作曲家。
41) Joachim, Joseph (1831-1907) ヴァイオリニスト・作曲家・指揮者・ベルリン王立音楽アカデミー(高等音楽学校)の校長。
42) Hellmesberger, Joseph (d. Ä.) (1828-1893)
43) 1848-51年音楽院は革命のため閉鎖されていた。その余波とはいえ、23歳の院長は異例のことである。いかに彼が若くして才能を認められていたかを物語るものであろう。
44) ブラームスがウィーンに進出した1862年、ヘルメスベルガー四重奏団は彼のピアノ四重奏曲を取り上げた。ピアノはブラームス自身が担当した。(Prosl, 前掲書, 61頁)
45) 上田敏「楽壇放言」『文学界』41号, 明治29年。引用は、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第1巻』音楽之友社 1990, 32頁。
46) Grädener, Hermann (1844-1929) ニューグローヴ世界音楽大辞典による。Tittelの前掲書では、音楽院在職は1875-1912年。
47) Friederike Singer (1853-?)
48) Door, Anton (1833-1919), ツェルニーの弟子。1869年から同音楽院でピアノを教える。
49) 後述のHauerによると〈Clavierschulinhaberin (ピアノ教室所持者) in Wien〉, 1593頁。
50) Verein der Musiklehrerinnen。この団体については、以下を参照した。
Georg Hauer: *Club der Wiener Musikerinnen—Geschichte und kulturpolitische Bedeutung der Vereinigung von ihrer Gründung 1886 bis zur Gegenwart*. Dissertation, Universität Wien, 1998。
51) Enescu, George (1881-1955) 1889年7歳で音楽院の予科に入学し、延が在学中の1894年に12歳で卒業した。なお彼もフックスに作曲を習っている(1888-1894間の音楽院年報による)。
52) 安藤幸「外遊の思い出」『婦人の友』46の6 1 1952年, 44頁。
53) Carl Lafiteの言葉。引用はBrachtel, 前掲, 111-112頁
54) Richter, Hans (1888-1976)
55) 幸田延「私の半生」41頁。延が聴いた可能性があるのは1890年11月9日か95年3月17日の演奏会 (Johannes Petschull: *1842-1942 Statistik von den Wiener Philharmonikern*, Wien-Leipzig, 1942, 70/72頁)。
56) Jahn, Wilhelm (1835-1900)
57) 幸田延「私の半生」41頁。
58) Kneisel, Franz (1865-1926) の組織した四重奏団, 幸田延「私の半生」41頁。
59) Patti, Adelina (1843-1919), コロラトゥーラ歌手。延の弟子・下坂道子の回想: 〈パティーと云う大ソプラノ歌手のことも伺いました。ほんとうに美しいソプラノであったそうです。その人がいつもマッサージをしていた身の廻りの世話をする人と結婚したとか〉。日本洋楽資料収集連絡協議会編『紀尾井町時代の幸田延』1977年, 43頁。
60) 幸田延「談話」『同聲会雑誌』第5号 1897年, 48-51頁。
61) 青柳有美「幸田女史西楽談」『女学雑誌』452号 1897年, 24頁。
62) 青柳有美, 前掲, 27頁。
63) Rosa von Geroldについては以下を参照した。
Marie Egner/Eduard Zetsche: *Erinnerungen von Rosa von Gerold*, Karl Gerolds Sohn, Wien, 1908
Carl Junker: *Das Haus Gerold in Wien 1775-1925*, Carl Gerold's Sohn, Wien, 1925
Johanna Gegendorfer: *Rosa von Gerold und ihr Salon*, Dissertation, Wien, 1948
64) 幸田成友「姉と妹と自分」『幸田成友著作集』第7巻, 116-117頁。
65) 幸田延「私の半生」39頁。
66) ちなみに後年妹の幸も、外国人教師ユンケルに、さらに高価なグァダニーニのヴァイオリンを譲ってもらっている(安藤幸「外遊の思ひ出」44頁, こちらは有償の可能性あり)。

- 67) 幸田延「私の半生」40-41頁。
- 68) 幸田延, 安藤幸他「『ワルツ合戦』をめぐる, ウィーンとシュトラウスに就ての座談会」『音楽世界』7巻10号 1935年, 162頁。
- 69) 瀧井敬子, 平高典子『幸田延の『滞欧日記』』東京藝術大学出版会 2012年, 口絵5参照。
- 70) 職業はLehmann's Allgemeiner Wohnungs-Anzeiger「ウィーン住民帳」Wienbibliothek Digital (<http://www.digital.wienbibliothek.at/periodical/titleinfo/5311>) の1894年度版により特定した。
- 71) 瀧井, 平高 前掲書 306頁注参照。
- 72) 瀧井, 平高 前掲書 305-6頁注参照。
- 73) 瀧井, 平高 前掲書 318, 336-7頁注参照。
- 74) 瀧井, 平高 前掲書 337頁注参照。
- 75) 瀧井, 平高の前掲書は, この日記をおこし, 解説, 注釈をつけたものである。ウィーン訪問に該当するのは, 304-351頁。
- 76) 瀧井, 平高 前掲書 350頁参照。
- 77) この2曲のデータについては, 平高典子「幸田延の作曲作品リスト」『「音」の社会史 一十九世紀から二十世紀へー』「音」の社会史研究会1992年度報告書31-32頁。ただしこの段階では, 筆者は, 明治30年に演奏された曲を, 1楽章形式の作品であるとしている。
- 78) 渡辺護『ウィーン音楽文化史』下 音楽之友社 1989, 93頁。
- 79) 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第1巻』, 47頁。
- 80) 青柳有美, 前掲, 27頁。
- 81) 〈幸田延教授がピアノを弾き, ヴァイオリンは完成していた第一楽章と第二楽章を, 二人の研究生, 幸田幸と鈴木フクがそれぞれ一楽章ずつ分けて演奏したのであろう〉(瀧井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン』中公新書 2004年, 76頁)。
- 82) 鈴木光次郎『明治閩秀美譚』東京堂書房 1892, 105-6頁。鈴木が同書で延を取り上げるため露伴に照会したところ, 露伴から書簡の形で回答を得たため, その回答の一部がそのまま掲載されている。
- 83) 東京芸術大学所蔵幸田延履歴書による。
- 84) Japan Weekly Mail 11月16日による(増井敬二『日本のオペラ 一明治から大正へ』民音音楽資料館 1984年, 付録30頁)。
- 85) ウィーン出発から帰国までの経緯は, 幸田延「外行記要」26-27頁。
- 86) 東京芸術大学所蔵幸田延履歴書による。
- 87) 平高典子「幸田延のウィーン留学」『「音」の社会史 一十九世紀におけるその変遷一』「音」の社会史研究会 一九九〇一九一年度報告書 1992年, 33-50頁。

(ひらたか のりこ)

Studium in Wien von Nobu Koda

Noriko HIRATAKA

Abstract

Nach dem Studium an der Ongaku-Torishirabegakari, der späteren Musik-Hochschule Tokio, hat Nobu Koda (1870–1946) als erste Stipendiatin vom Kultusministerium im Bereich Musik, von 1889 bis 1890 in Boston und von 1890 bis 1895 in Wien studiert. Nach der Rückkehr hat sie sowohl als Pädagogin als auch als Musikerin großen Einfluß auf die japanische Musikwelt ausgeübt. In Wien hat sie am Wiener Conservatorium als Hauptfach Geige bei Josef Hellmesberger (d. J.), Harmonielehre und Komposition bei Robert Fuchs und Klavier bei Friederike Singer studiert. Trotz zeitweiliger Abwesenheit hat Nobu Koda alle Fächer mit „Ausgezeichnet“ abgeschlossen und auch „Reife (ein Diplom)“ erworben. Das damalige Wien, kurz vor der Jahrhundertwende, war ein kulturell sehr reiches Zeitalter und hatte auch musikalisch sehr viel zu bieten. Nobu hat durch ihren häufigen Konzertbesuch und ihre aktive Teilnahme an der Wiener Gesellschaft die damalige Atmosphäre unmittelbar miterlebt und sie nach Japan mitgebracht. Ihre dreisätzige Violinsonate, die sie bei Fuchs komponierte, war die erste Kammermusik in Sonatenform von einem Japaner.

Keywords: Nobu Koda, Wien, Einführung der europäischen Musik